漱石と明治

Junko Higasa

夏目漱石は慶應 3 年に生まれ大正 5 年に没している。彼はまさに明治時代教育渦中に生きた人であり、西洋化する前の日本の精神を持って新時代に突入した人であった。

ではその明治の教育とはいかなるものであったか？江戸から明治の学校教育の変遷を見ていくと、江戸時代は身分順であった席順が明治時代には成績順に変わる。そしてノートは石板であったという。生徒は石板がいっぱいになるとそれを消して、次のことを書かなければならなかった。即ち一度書いたことは消す前に暗記する必要があった。また授業では模範解答が求められた。さらに卒業試験では筆記試験の他、口頭試問では教師・保護者・役人の立ち会いのもと、生徒の意見ではなく暗記した知識の披露が求められた。すなわち明治の教育は小学校の段階から「自分の意思ではなく国の意思に従う暗記力・理解力の高い優秀な人材を選抜し、それを育成する」ところから始まった。明治時代の就学人間の恐るべき暗記力はここからきているのだろう。漱石はその教育の流れの先で東洋人の教養である漢学を修め、さらに新しい時代に必要になるだろう英語力を鍛えた。現代人が及ばないグローバル教育はすでに明治の中で行われていたわけである。しかし同じように「国際化」を目指したとはいえ、漱石が子供の頃受けた教育は「自国の優れたところを認識する」ためであり、後に漱石が教師として施さなければならなかった教育は「西洋の優れたところを吸収する」ためであった。漱石は日本古来の精神美が物欲の中で失われつつある狭間に生きていた。

ロンドン留学から帰国後の明治 38 年『吾輩は猫である』で日露戦争時下の社会を描いた漱石は、急激な文明開化の影響で「国家よりも個人」へと移行しつつある社会の動向を懸念した。そして『こころ』で明治時代の終焉と共に殉死した乃木大将を批判する新世代から「明治の精神」を守った。それはまさに漱石が生きた時代にしみ込んだ東洋の美徳的精神性から発せられたものであろう。漱石は大正 3 年（1914 年）学習院で「私の個人主義」というタイトルの講演を行った。それは本当の個人主義とは「権利には義務が伴う」という本来の真理と未来への確認要望でもあった。漱石の頭の中には「明治の精神の象徴」であり学習院院長でもあった乃木希典の姿があったのではないか。乃木希典こそ本物の個人主義を貫いた人ではなかったろうか？彼は明治天皇から孫の教育を要望されて学習院に就任したのであるが、明治天皇行幸時に飾られた榊を自費で学内に祀った。今も成長し続けているその木には達成祈願が後を絶たない。

「明治」と共にあった乃木希典の評判は日露戦争前から高かったが、難攻と言われた旅順攻略でそれは不動のものとなった。けれど評価は戦勝だけではない。降伏したロシア兵への寛大な処置は国際的に評価され、日本各地に乃木大将が祀られているのも、その人徳によるものであろう。多くの戦死者を出した彼は自ら生きて帰ることを恥とし、凱旋歓迎式典を断った。そして自分の 2 人の息子が戦死したにも拘らず、他の戦死者に詫びる気持ちが強く自害を試みて止められているが、明治天皇の「（どうしてもというのなら）朕が世を去った後にせよ」という言葉に従い、明治天皇大葬の日に夫人と共に自刃した。9 月 13 日。この日はなんという日であろう。漱石を世に出した「猫」の命日でもあり、漱石の中の明治が終わった日でもあった。　(2012.10.7)